

二次元ドリームノベルズ/PDF立ち読み版



Devil Investigate

デビルインベストイグアイト

小説 天戸祐輝

挿絵 中島秋彦



第一章	ミッション・スタート	006
第二章	闇商人の犠牲者たち	027
第三章	砕かれし二つの心	063
第四章	屈辱の宴	127
第五章	穢れし調査官たち	201

登場人物紹介

Characters



らんぐうりな
蘭宮璃那

警察では手に負えない魔物関係の事件を解決する『Devil Investigate』に所属する活発な女性。仲間を危険に晒したくないがために自分で危険を背負い込むことも多い。

かざくらめぐ
夏桜恵

PCを使った後方援護を主とする璃那のチームメイト。常に周りを気遣う優しい性格。3人の中では一番年下で、妹的な存在である。

シディア＝アスア

璃那のチームメイトで、3人のリーダー的な存在。理知的で冷たい印象を与えるが、実は仲間思い。戦闘力は一番高く、電気のみちで敵を倒す。

きろ
騎炉

全世界に展開する騎炉コンツェルンの総帥。その正体は謎に包まれている。

イメザナ

何者かによって召喚された淫魔。男と肉交する事で精気を奪い相手を殺す。

「グヒヒ……、当てただけで喘ぐ雌めすにすぐ挿入てやるもんかよ、お前みたいな淫乱はこっちの穴から突き刺してやらあ」

膣内に挿入されると思っていた亀頭が離れ、ツウーと股間部の筋を辿り、桃尻の割れ目、まだ色素の沈着していない薄い色の窄みへと目標を変えてきた。

「はうっ!? やめっ……そこは違っ……」

「こっちの孔から犯してやる、淫乱女の雌マ○コはあとだ！」

処女尻に陵辱機械の切っ先を当て、ブデルが背部から押し掛かってきた。男の体重まで乗せられた二つの美乳はベッドと肢体の間で痛いほどに潰れて面積を広げ、ブラに収まったままの左胸からは乳輪の色まで現し、谷間を通っていた触手幹を柔房で包み込んでしまう。

陵辱者は美しい女調査官を犯せる喜びに興奮しているのだろう。彼女の着ている制服をジャンパージャケットごと襟元を掴んで引き剥がし、露になったうなじを長い舌で舐め、喉から肩までの肌にヌメヌメとした唾液を擦り込んできた。

今にも尻孔を貫こうとする雄の熱が伝わり、肌に染み込んだ媚薬の所為で狂おしい疼きとなって処女の肢体を欲情させていく。

(くうあ……んん……こんなの……嫌なはずなのに……)

媚薬で欲情させられた肢体は潰れた胸の痛みを心地いい圧迫感へと変換し、首筋を舐められるおぞましさを甘美な刺激と感じて背筋をくすぐってくる。堪えようとも唇からは吐息が洩れ、青い瞳が抗えない肉悦に潤んだ。

(はぁんん……このままじゃ……本当に、ひいやっ!?)

ズリユツ……。

「痛っ、やめ……」

犯される恐怖と肢体を襲う甘美な刺激の中、なんとか逃げ出そうと潤んだ瞳で周りを見渡した瞬間だった。小さな窄みに刃物を突きつけられたような痛みが走り、皺を押し広げ、機械触手の亀頭がメリメリと直腸を拡張し突き刺さってくる。

「嫌っ……こんな……やめ……くはああアっ！」

ズニユツ！ ズプヌプニユプズヌニユウウウウウウウウウウウウツ！

「ひいあうっ！ いら……裂け……ひぎいいいいいいいいいい——ッ！」

鋭角なおとがいを仰け反らせ、璃那は部屋中に響き渡るほど大きな悲鳴をあげた。小さな窄みは皺を限界まで引き伸ばされて貫かれ、硬度を増した焼き鉄のような触手がヌプヌプと突き込まれていく。一回り太い切っ先は蛇腹状の腸壁をゴリゴリと削り広げて体内を突き進み、その凶器ともいえる先端がS状結腸の奥壁を突き上げ、処女調査官の桃尻の中を軟硬い陵辱機械と火傷するほどの雄熱で埋め尽くした。

「くはあ……びいぎいいいい……お尻が裂け……いら……がひい……」

裂けてしまっような尻孔の激痛に舌を突き出し、ブロード美女は青い瞳を見開いて途切れ途切れの呻きをあげた。異物を挿入された腸内は、蛇腹状の筒内を隙間なく埋め尽くした熱く硬い陵辱機械の感触を脳へ伝え、その切っ先が腸の奥でグニグニと首を振り、腸壁を齧るおぞましい感触まで伝えてくる。

彼女のキュートな美貌は少女と見間違っうほど目尻を下げた幼く変わり、今では男の陵辱

心を誘うただの女の貌となって息を荒げた。

「ゲゲゲ、きつくていい具合だぜこの淫乱尻は。ツルツルした腸壁が俺のチ○ポに絡みついて、すぐにも射精しちまいそうだあ」

「言うなケダモノ！ ううっ……私から早く離れて！」

触手を突き刺したまま動かさずとはしない男に怒鳴り、自由になった両手で陵辱者から逃れようとベッドを掻き毟る。だが媚薬によって力の入らなくなった両手では相手から離れる事などできず、男の陵辱心を高めるような行動しかできない。

「ヒゲゲ、今すぐ気持ちよくしてやるぜえ」

ズニユツ……ズブ……ヌプヌチャツ……ズニユツ！

「びいはっ……ぎひいいいいいいっ！ 動かす……な……痛……いらアあアッ！」

本来の機能とは逆の挿入を繰り返され、異質な粘着音を鳴らして尻孔が貫かれ始めた。ツルツルとした腸壁を硬く広がった機械エラで削られる度に、璃那の唇からは悲鳴があがり、肢体が引き裂かれ、内臓を引きずり出されてしまうような激痛に身が震える。

ベッドを掻き毟っていた手は尻辱に堪える為にシーツに爪を立て、両手の指を限界まで広げてピクピクと痙攣させ始めた。

「ゲゲゲ……どうだ初めてケツに挿入られた気分は。声も出ねえくらい痛いだろう」

「ぐあ……裂けっ……初めてがお尻だなんて……うくううううッ、もうやめ……壊れ……んあぐうッ！ がうッ！ あぎいいいいッ！」

ヌプヌプと異質な挿入音を鳴らして尻孔を捲り返す機械触手は、感情などないかのよう

に尻皺を引き伸ばし、桃尻を突き刺して美女調査官に苦痛を強いてくる。

彼女の意識は尻処女を貫かれたショックと痛みに薄れ、肉体の感覚まで消え始めていた。「ヒゲゲ……、痛くて氣い失いそうなのか？俺はお前がそのまま死んでも犯し続けるぜ、おらッ！おらッ！」

「あぐっ、んあ……きやぐうううッ！もうダメ……痛くて……意識が……」
ピュシユウウウッ！

「ふあんんんッ!? 媚薬がお尻の中で……染み込んでくるううううウッ！」

再び触手幹から甘い香りの媚薬が噴き出し、内外から彼女の肉体を淫欲で灼いてきた。完全に前を開かされた紫のブレザーやブルーのブラウスは媚薬が染み込んで色を濃く変え、まるで衣服までもが発情したようにシート上で淫らに舞い振れている。

二つの美乳はその桜色の頂まで媚薬でヌメ光らされて、硬いベッドで『く』の字に潰し擦られ。敏感な女芯と淫唇は真下に通された触手の所為で直接大量の媚薬を浴び、火傷したように熱痒くなっていく。媚薬を直接かけられた腸内は、煮えたぎった熱湯でも注がれたように熱く疼き、切なさの混じった激しい悦痒みで全身の性感を過敏に変えた。

「あがあぐうううッ！んはあっ、なにが……はふっ……お尻が急に……痺れ……はううううううッ！」

引き裂かれるようだった尻孔の痛みが嘘のように消え、突然腸内に蟲を這わされたような痛痒い肉悦の奔流となつて桃尻を雌と変えていく。剥き出された肉芽や淫唇を擦るムズ痒い陵辱幹の刺激は、数倍にも膨れ上がって肢体中を駆け巡り、彼女から理性を削り取り

始めた。触手の律動に併せて揺れる肢体の下で潰れていた肉房と乳首は、心地いい圧迫感と頂に鋭利な針を刺されたような切ない悦痺れで、今にも溶けてしまいそうだ。

「はふっ……身体中が熱く……んはあッ！ 私の身体どうなつて……んふうう……」
ニユプッ……ヌプッヌプッヌプッ……。

璃那は金色の髪を振り乱し、荒波の如く押し寄せてくる肉悦に抗い続けた。だが媚薬に染められた肉体では快楽に抗いきる事などできず、尻奥を突き上げられる度に形のいい桃尻がピクピクと痙攣して秘孔から愛液が溢れ、美乳は肢体が揺すられる度に醜くひしゃげて歪み、ピンッと尖った乳芽がシートに擦れて、肉果実が溶けるような肉悦が肉体全てを包んでいく。挿入の悦楽を知ってしまった桃尻は、まるで膣のように腸全体を蠕動させ、機械触手をネットリとした腸壁で抜き亀頭部を撫で回した。

美乳と触手幹に擦られる淫部、そして深く貫かれた尻辱の快楽にブロンド調査官は堪えきれない喘ぎを洩らし、肉悦に耐えようとしている理性がグズグズと崩されていく。

「ひゃふッ！ んんッ……身体が……おかしく……嫌だ……イヤだああああッ！」

青い瞳が淫らに潤み、美唇から濡れた悲鳴をあげてしまう。尻孔はヌプッヌプッと淫らな異質音を滑らかに鳴らし、淫猥に潰れた美乳が更に広がって谷間を陵辱している触手幹を強く包み、意思に拘らず激しく抜く。胸を嬲られる心地よさと尻孔を貫かれる電流のような痺れは激しく脊髄を麻痺させ、処女の肢体に雌の喜びを刻んできた。

「くうはッ、はんんんんんんんッ！ もうイヤッ！ んうッ、こんなの……んあくッ、あつ、ひうッ、私は……わたしはああああああッ！」

ベッドに上半身を突っ伏したブロンド美女の肢体は激しくくねり、シーツを皺くちやにしながら激しく身悶えを始めた。背中から押し掛かっている男の体重を全身で感じながら犯される被虐感に、彼女の肉体は狂おしい疼きに襲われ、触手の一突きごとに頭の中が白く染まっていく。

股間を通り女芯と淫唇を擦る機械幹を、自ら下腹部の所で握り律動を封じようとするも、触手はそれを手淫としたように手筒を陵辱し、淫らな素股穴でピストンを繰り返し感電するような刺激を与えてくる。

尻孔は激しいピストンで直腸の一部が尻孔から掻き出されてしまい、蛇腹状の肉筒は雄機械を奥へ奥へと呑み込まされ、その機能を完全に雌尻へと変化させられてしまった。

美女調査官の肢体は尻孔への一突きごとに大きく揺れて、発情汗が辺りに飛び散り、意に反して全身から立ち昇ってしまった甘い雌の香りがブデルの本能を掻き立ててしまう。

「んはあッ！ あッ、はあふッ……、わたしは何をやって……こんなのもう嫌なのに……あくッ……何も考えられなく……」

媚薬を浴びた肢体に巻き付き全身の肌と敏感な部分を颯る陵辱機械に、璃那の理性が麻痺していく。少女に見える美貌は淫らにトロけて唇の端から唾液を零し、初めての快樂に痺れていく肉体が言う事を聞かない。

シーツに擦れた硬く熱い陵辱幹に谷間を陵辱される双美乳は、切なくも溶けてしまうような刺激に今にも破裂してしまいそうだ。敏感な女芽と淫唇を擦る機械幹の感電するような刺激に、ピンクルージュの唇から快樂の喘ぎが止まらなくなり。S状結腸の奥壁をドス

ドスと激しく突き上げてくる熱い機械亀頭に処女脳は白濁し、雌と変えられてしまった尻がゆつくりと前後に動いてしまった。

「くああうううううッ！ も……もうダメッ……んはッ！ これ以上犯されたら……抵抗できなく……んはッ……あんんんんッ！」

情欲をそるように潤んだ青い瞳が見るもの全てを揺らした。形がいい唇は口角が完全に下がり、喘ぎに合わせて唾液がダラダラと零れていく。

尻辱とはいえ悦楽を知ってしまった肢体は、快楽に抗う術を持たない彼女にはもう止める事などできず。淫尻と化した桃尻を激しく振り乱し、薄ピンクの腸壁が掻き出された尻孔がニュプッニュプッと淫らな挿入音を奏でてしまう。腸内に出された媚薬はコブコブと触手幹を啜えた尻孔から溢れ出し、糸を引きながら床に滴った。

「あふッ、もうっ……もう許し……んっ、んあっ んふっ、んあうううッ！ もうやめっ、やめろ……このケダモノオオオオオオオオオオオッ！」

璃那は両手の指を限界まで広げ、ベッドに爪を深く突き刺して悲鳴をあげた。全身の肌は鳥肌が立つようにざわめき、秘孔や尻孔はヒクヒクと強く締めまり痙攣を始めている。子宮は収縮を繰り返して膣を蠕動させ、腸は全体を激しく波打たせて触手を締め上げた。

秘孔からは漏らしたように愛液が溢れ、瞬く間に何本もの処女蜜の糸が艶めかしい太腿を伝い、脱がされたピンクの下着と黒ストッキングに染み込み足首へと流れていく。

「淫らな女だぜ、一突きごとにチ○ポに腸壁が絡みついてきやがる、ゲゲゲ……、出してやる、この雌尻の中あを俺の精液で一杯にしてやるぜエえ！」

「ぐはあッ！ はふッ……あッ、あッ、やめ……くはっ……くうう……抜いて……早く私の中から汚いモノを抜いてえええっ！」

改造される前の癖だろう、ブデルは突然腰を激しく前後に振り、淫らな挿入音を奏でる尻尻に引き締まった腹を叩きつけ始めた。同時に肢体に絡まっていた機械触手は溶鉱炉の如く熱を高めて柔肌をキリキリと締めつけ、素股させている幹が激しく愛液を飛び散らせ、より強く淫唇に機械幹を喰い込ませてくる。

「グへへ……きつすぎて出ちまう、ぐお……おおおっ！ 汚してやる……うへ……お前の淫尻を俺の物にしてやるぜえ……おうっ、ぐおおおおおおおおおっ！」

「いやあああッ、やめ……あうッ……出すな……胎内ななかはやめろおおお！」

全身に巻き付いていた触手が一気にビクビクと脈動を始め、機械筒内に熱い粘液をビュルビュルと駆け昇らせ始めた。陵辱機の中を移動する雄液は両太腿、細腰、双美乳、首へと次々に熱い粘液の感触を伝え、熱い速弾となって胸の谷間を駆け抜け、淫部を通り尻孔へと向かっていく。

「いやッ、出すなッ、やめ……離してええええええええええッ！」

璃那は体内を穢される恐怖に肢体を大きく揺さぶり暴れる。だが背部から押し掛かれ、触手で拘束された肉体が男から離れる事はなく、無情にも雄液は機械幹を一回り膨らまして尻孔を広げ、ドクンッドクンッと鼓動のような音で尻尻の中へと送られてきた。

「いやッ……嫌だ……はううッ!? お尻がまた広がって……んあ……許してえ……やめ…………」

ドプツ……ビュプツ、ビュルルルルルルルルッ!

「ぐあはッ! 熱ッ!? お尻の中で熱いのが……お腹が熱く……嫌……いやああああああああああア——ッ! ツッ!」

腸内にマグマのような粘度と高熱の陵辱液を浴び、尻辱によって刺激された美女の肉体が一気に絶頂へと押し上げられた。堪えようのない肉悦の奔流は肢体を駆け巡り、胎内射精に悲鳴をあげる処女を快楽の電流で包み込み、背を弓なりに仰け反らせていく。

激しいピストンを繰り返しながら、次々と穢れない処女尻に吐き出されていく灼熱の雄液は、そのドロリとした感触で次々と蛇腹状の腸壁に絡みつき、その溶岩のような熱で処女の胎内を焼き肉体と脳に雄液の熱さを刻みつけ、彼女の思考力を完全に奪い去った。

全身は感電したかの如くビクビクと痙攣を繰り返して双美乳を大きく揺らし、露になっている右乳首も快楽を告げるようにプルプルと震え、子宮は初めての絶頂に喜び、秘孔からはバシャバシャと処女蜜が噴き出した。

彼女の足元には漏らしたような愛液の湖が広がっていた。美貌は悲しい絶頂に唇をワナワナと震わせ、唾液が両端から零れて細い頬を妖しく彩っていく。

「んあああああああッ! ああ……んん……まだ出てる……んあッ……お尻に熱いのが……まだあああああああッ……」

奥函がカチカチと鳴り、金色の艶髪が嫌々と振るわれる貌に合わせてサラサラと揺れる。淫幹に擦り磨られていた淫核と淫唇はジンジンとした甘い痛みで下半身を包み。未だにピストンし吐かれる精液に灼かれ続ける腸内は、奥のS状結腸をゴリゴリと亀頭に擦られ、



熱い白濁液を腸壁に塗り込められる感触を肢体に刻み込んでくる。

淫尻と化し、陵辱液を浴びる事に喜びを感じ始めた腸は、精を注いで貰った歓喜に、焼き鉄の如き熱さを保つ機械触手にネットリと腸壁を絡みつかせて抜き。皺を限界まで引き伸ばされた尻孔はヒクヒクと痙攣を繰り返し、内部に出された白濁を触手幹との隙間からドロリと溢れ返した。

「くはッ……んッ……はあはあはあ……うう……犯され……こんな奴に犯され……」

長い絶頂を終えたブロンド調査官はベッドに倒れるように突っ伏し、絶頂に弛緩してしまつた肢体を晒したまま、赤く染まつた美貌をシートに埋め涙を堪えた。両腕の力は完全に抜けてベッド上に力なく投げ出され、尻孔からコップコップと溢れ出る陵辱液の粘つた感触が、陵辱されてしまつた悲しい現実を心に刻みつけてくる。

「ゲゲゲ……、きつくていい尻だつたぜ璃那、まだ俺のモノに絡んで、精液を絞り取ろうときつく締めつけてきやがらあ」

「うう……もう離して……アンタなんて……能力さえ使えたなら……くう……」

璃那は悲しみにうなだれ、悔しさに血が噴き出すほど唇を噛み締めた。肢体を隠す事も忘れ、尻中で射精を続ける硬く熱い機械触手の脈動を感じながら。犯されてしまつた屈辱と陵辱に感じてしまつた悔しさに身体の震えが止まらない。

「ヒヒ……、何を言ってもお前はもう俺の穴だ、これからもっと楽しませて貰うぜ」

「んふううう……っ」

ブデルが後ろから首筋をネットネットと舐め回し、両手を肢体とベッドの間に差し込んで柔

房を揉んできた。尻陵辱で絶頂し、敏感にされてしまった肢体はそれだけで再びざわめき、両胸から伝わるムズ痒くも心地いい圧迫感に濡れた吐息が洩れてしまう。

「随分と敏感になったじゃねえか、ケケ……、今いい事思いついたぜ……」

首筋を舐めていた舌を形のいい耳に移し、ネチネチと舌尖で嬲りながら男が囁いてきた。「お前が単独でここにくる訳はないよなあ……」

(こいつ……んあ……何を考えて……)

全身が鳥肌立つような耳の刺激に耐えながら囁かれる言葉を慎重に聞く。尻孔を貫き陵辱液を放った人工触手は再び律動を始めていた。胸を揉む男の両手は握力を増し、今にも二つの果実が破裂してしまいそうなほど痛く、くすぐりたい。

彼女は再び始まった陵辱に声もあげず、唇を噛み締めながら男の言葉に耳を傾けた。

「確かお前の仲間はシディアと恵だったか？ ケケ……、今からここに居る野郎どもを起こしてお前の仲間も見つけ、精神が壊れるまで輪姦して俺たちの雌にしてやるぜ！」

「——ッ！」

男の言葉に全身が震え、言葉すら発する事ができない。頭の中には全裸にされたシディアと恵が何本もの機械触手に肢体を拘束され、胸やお尻を幾つもの手で嬲られ、触手の先端で三つの穴を貫かれ涙を流しながら陵辱されている姿が浮かぶ。そしてそこに自分も加えられ、自我を壊された二人が陵辱液まみれになりながら恍惚の笑みを浮かべている姿。

やがて現実になるであろうその姿に彼女の脳は溶岩の如く煮えたぎって精神が高ぶり、肌を晒された胸や淫部が赤い発光を始め、その赤光を美しい全身へと広げていく。

(おかしいですわ……、どうして私はこんなに醜い魔物に感じているんですの!?)

「ゲヒヒ。この雌、もウ漏らしたように濡らしテやがるぜ！ 我ニ舐めて欲しいのかア？」

肉体の異変に戸惑い続ける中。突如濡れた股布を指摘され、シディアは慌てて太腿を擦り合わせて淫部を隠した。だが美貌に射精をした魔物がすかさず両太腿を押さえて左右に広げ直し、扇情的に貞操筋が浮き出した太腿の間に獣貌を割り入れてくる。

「ゲゲッ、いい匂いダあ……ジュル……」

「ンふあああああつ！ んう……おやめなさい……んあうつ……」

二枚の薄布越しに長舌で淫部を舐められ、堪らず細顎を仰け反らし濡れた声をあげてしまった。ザラついた舌の刺激に淫部はウズウズと疼き、自然と肉体が痙攣したように震え始めてしまう。

「ヒゲゲ、マ〇コ舐められただけで随分といイ声で鳴くじゃないか。こつちモ直接舐めてやる！」

ブチッ！

「ああっ!？」

ブラ越しに胸を揉んでいた手が突然谷間の布を掴み、荒々しくレースブラを引き千切り峰乳を冷たい空気に晒した。両胸は大きく揺れて魔眼に映され、プックリと膨らんだ乳輪や限界まで尖った薄赤い乳芽が、持ち主の恐怖を代弁するようにフルフルと震える。

「グベベ……美味そウな胸ダ、チャブ……」

「やめ……あん……あふうんんんんんっ！」

蛇を思わせる長い舌が左の乳輪をなぞるように舐め回し、少し大きめな親指の先ほどの頂を包み込んでいく。生暖かくザラついた舌に舐められた左胸は、それだけで敏感な乳芽を針で貫かれたような痛痒い刺激に包まれ、大きな果実の内部に焦燥感にも似た発情のシコリを作り出していく。

(うう……こんな事で、私は負けませんわ……)

心の中で肉悦に耐える。だが肉体は如実に女の喜びを感じ、少しずつ脳に発情の淫霧をかけてくる。肢体は魔物の下でピクピクと震え出し、一目で感じているのが分かるほどだ。「ヒゲゲッ、こんナに感じまくりやがって。もう我慢できん！ 犯シ貫き、我らノ雌になるマで喘ギ鳴かせテくれる！」

ビリ……ビリビリビリビリイイイイイイイイイイイッ！

「きゃあう——っ！」

胸を舐め、まだ射精を行っていない魔物が己の舌で悶える美女の姿に我慢ができず、淫部を齧っていた仲間を退かし、ストッキングを引き裂きTバックの下着を露にしていく。

極小の下着だけにされた淫部には冷たい空気が触れ、細いクロッチを通り抜けた空気が秘孔から膈の中まで冷やしてくる。下着の前部には二等辺三角形に整えられた青紫の茂みと、小指の先大に剥け出た淫核が透け、痛いほど魔物の視線が集中しているのが分かる。

プシュッ……。

美女調査官が恥ずかしさに貌を背けた瞬間。狭く薄いクロッチから生暖かい女蜜が噴き出し、弧を描いて床の上に飛び散った。

「ゲヒッヒッヒッヒッ、コの雌、布越シにマ〇コ見られたダケで蜜ウ噴きやがったッ！」
(どうしてですのっ!? 見られただけでこんな……)

意思に拘わらず噴いてしまった女蜜に穢れた美貌を火照らせ、心臓が高鳴ってしまふ。秘孔はヒクヒクと蠢き、何かを啜え込もうとクロツチの布に吸いついていた。

「蜜まデ噴きヤがってコの淫売めがっ。もう我慢がデきぬ、その膣を貫いてやるウ！」
プチッ!

興奮した魔物がクロツチを引き千切り、愛液に濡れた太腿の間に腰を進み入れてきた。腰部だけとなったTバックは捲れて淫部を晒し、薄く左右に開き薄紅色の粘膜を覗かせた淫唇には、熱い猛りが近付いてくる気配まで感じる。

「あうっ! 嫌ですわっ、魔物に犯されるなんて……そんな醜いモノを挿れられるくらいなら死んっ!」

シディアは秘孔に近付く雄の熱に怯え、慌てて叫びながら上半身を起こした。だが自分の秘孔に龟头を押しつけた凶器ともいえるモノを見た途端言葉は止まり、美唇が震えてしまふ。

あまりの興奮に龟头が一回り膨らみ、幹の肉爛れがクラゲ笠のように広がりがうねっている。幹は口淫させられたモノより太く、爛れ肉の間からは甘い香りのする透明な体液まで滲み、一種の棒状生物のように魔体の股間で反り勃っていたのだ。

(こんな太いモノ……無理ですわ……)

今にも挿入されそうなモノに恐怖を感じ、背筋に冷たい汗が伝っていくのを感じた。

「今からコレでお前ノ肉体に魔ノ悦楽を擦り込み、我らノ雌にナるまで身体を穢シ、その肉体ヲ造り変えてやる」

「ひいっ！ そんなの入りませんわ……やめ……そんな穢らわしいモノを挿入するなんて……絶対に赦しませんわ……あうっ……」

秘孔を広げ、強引に膣内に挿入しようとしている巨大な陵辱器官に、とうとうシディアの赤い唇から弱気な言葉が洩れてしまった。だが同時に淫部に当てられ、美女を焦らす拷問具のように微妙な動きを繰り返す亀頭に鼓動が速まり、灼熱の滾りなまきと剛鉄同等の硬さで秘孔を責める感触を、受け入れてみたいという淫らな感覚が芽生えてしまう。

「痛みヲ感じるのハ最初だけダ。すぐに慣れ、人間相手デは得られぬ快楽に溺レ狂い、自分から尻を振る雌犬に変わる、ヌウオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」

「そんな、やめ……身体が裂け……あがあああつ！ 嫌、ダメ……アソコが広がって……ひぐッ、ひいぐううううううううううう—— ツッ！」

ズニユッ……じゅぷヂュブジュブウウウウウウウ—— ツッ！

ゴリラ似の改造魔物が機械の腹部に力を込め、一気にシディアの肢体を貫いてきた。淫唇は壊されてしまったかのように形が歪み、拳のような亀頭に秘孔は裂けるように広げられ、グブグブと異形の肉幹を呑み込まされていく。男を知っているにも拘わらず肉体には処女を失った時以上の激痛が走り、唇から叫ばれた悲鳴が大広間に木霊していく。

「びいぐッ……太い……あふッ……太いのが私の胎内を……ンあああッ！」

胎内を貫かれていく激痛に舌が突き出て、痛みに見開かれた紫の瞳からは自然と涙が溢

れていく。胎内を突き進む極太の雄槍は彼女の腹部を醜い魔肉で圧迫し、一気に膣の最奥まで貫き子宮口に醜い龟头を押し当ててきた。捲れ上がったタイトミニの下では、贅肉一つない滑らかな腹部に龟头の陰影が浮かび上がっている。

「ぐはッ、あう……こんな奥まで……はあはあはあ……初めてですわ……はふうう……」

唇を大きく開けて荒い呼吸を繰り返して、峰乳を上下に揺らして巨大な魔ベニスで貫かれた痛みに耐える。下半身には醜い龟头が子宮口に当たっているのを感じた。幹の肉爛れが膣壁に絡まり、魔淫熱を膣に擦り込んでくる。限界まで広げられた秘孔と膣はギチギチになって雄槍を包み、息をするだけで膣全体が張り裂けてしまいそうな状態だ。

だが、同時に肉体の全てを満たされたような充実感が身体中を駆け巡り、膣内から広がっていく雄熱に痛みが癒やされていくのを感じる。

「ゲゲゲ、淫らナ雌だア……。我のモノを全部呑み込み、もう膣が絡みついテきたア……」
尖った右乳首をブラウスに擦らせている峰乳にダラダラと涎を滴らせ、魔物が苦痛に歪む美貌を心地よさげに見つめてくる。周りにいる二体も貫かれた美女調査官の姿に興奮し、胎内に収まった巨大魔根と同じように肉幹の爛れから甘い香りの液体を滲ませ始めた。

「これでお前は我らノ雌だア……、一生犯して膣の中に魔液ヲ注ぎ続けテやる！」

ズチャッ……ズニユ……ジュブジュニユ……

「くうは……ひいんッ……こんな屈辱……決して赦しませんわ……んあッ、くはあアあああアああアああアああア……」

膣壁全てを秘孔から掻き出すような激しいピストンが始まり、シディアの美唇から濡れ

た悲鳴が洩れ出した。膣は魔根が引き抜かれる度に子宮まで引きずり出されてしまうような錯覚を生み、子宮はドストドスと子宮口を突き上げられる度に胎内で揺れ動き、破裂してしまいそうな衝撃が肉体を駆け巡っていく。滑らかな白い腹部は膣内の拳亀頭が動く度にポコポコと膨らみ、魔物の穴にされてしまった事実を心に刻み込んできた。

「どうだ人間相手でハ味わえぬ快樂だろう、ゲゲ……。我も気持ちよくて、今に毛射精してしまいそうダあ」

「こんなモノで気持ちよくなんて……。ンん……。ありませんわ……。私は決して魔の雌になんて……。はうッ、ンはああアあああッ！」

（私の身体どうなつて……。魔物の陵辱に感じるなんて、おかしいですわ……）

数度目の膣ピストンを受け、一際強く子宮口を突き上げられた瞬間。クール美女は身が引き裂かれそうだった挿入の痛みが完全に消え、膣内に弱電流を流されたかのような肉悦に歓喜の声を奏でてしまった。もう自分の身体の感覚に思考がついてこない。膣内を陵辱するモノは太すぎ、すぐに肉体が馴染む筈はないのだ。

「な、なんでこんな声が……。あふッ、んあ、うんん……。はあふううううううッ！」

自分の下半身に意識を集中させた彼女は、巨大魔根に早くも膣が慣れてしまっているのを感じてしまった。秘孔は広げられる度にムズ痒さを生み、膣内は大きく張り出たエラと肉幹の爛れに襲を絡め削られ、甘美な痛痒さに痺れていく。子宮口は亀頭に殴られる度に少しづつほぐれ、子宮が魔肉槍の熱で溶かされていくようだ。

「気持ちいいだろう、我慢せず早く自分デ尻を振って我ノ精を絞りヤがれ」

「気持ちよくなつてありませんわ……あつうん……私は魔物に感じたりなど……はふッ……しな……はふッ！ はああんんんんんッ！」

ジュプッ、ニユプッ、ジュププウッ！

改造魔物の腰つきが徐々にスピードを増し、淫らな水音が連続で奏でられ始めた。峰乳は大きく揺れ、右房の頂が制服に擦れ、掻きむしりたくなるほどくすぐつたくなっていく。快楽を耐えようとしても唇からは喘ぎが止まらず、紫の腫は目尻を下げ潤んでしまう。膣は魔根をマッサージするかのように爛れ幹にネットリと襲を絡ませ、より深く啜え込もうと全体をうねらせ、奥へと向かつて蠕動を繰り返していく。

（なぜ私はこんな醜いモノで感じているんですのッ、先ほどまで感じていた痛みが消えて……こんなにも身体中が疼いッ！）

「ンああああアアアアッ！ 膣が……アソコがああああああアアアアッ！」

魔根の肉爛れから染み出した液体に膣全体が感電したかのように痺れ、別の生き物の如くうねり始めた。脳は経験した事のない感覚に対処ができずに混乱を始め、汗でピツタリと制服を貼り付けた肢体が、魔物の下で淫らな舞を踊り始める。

（こんな……こんなに激しく突かれたら……我慢できなく……）

逆ハート型の美尻には秘孔から溢れ出した愛液が伝い、魔物の腰突きに引きずられるように上下に動き始めてしまう。まるで自ら迎え腰を使っているような彼女の秘孔は、魔物の腰が叩きつけられる度に愛液をしぶき、床に幾つもの女蜜溜まりを作り始めた。

「ヒッゲッゲッ、コの雌、あまりに気持ちよすぎて尻振り始メやがったア！」

「ち、違いますわ、はふッ……私は感じてなど……ひゃんふうッ、ンはああッ、あふッ、ひやうッ……はふうううううッ……」

ぶつけられる辱めの言葉を否定しようともお尻は上下に動かされ、唇からは濡れた声が断続的に洩れてしまう。膣は過度の雌痺れに、今にも溶かされてしまいそうな肉悦を伝えてくる。

「そんなに尻振りたければ思う存分振らしてやる」

「ひゃんんんッ!？」

改造魔物が突然体位を入れ換え、魔物を美女の肢体が跨ぐ騎乗位の体勢に変えられてしまった。自分の体重でより深く挿入してしまった巨魔根はグプりと子宮口を押し開き、初めて感じる子宮口で龜頭を啜える激しい悦痒みに脳が麻痺していく。

「ああああああああああッ! おかしいですわッ、魔物の醜いペニスで感じるなんて、どうしてですのッ、どうしてえエえええエええええエええええエええッ!」

ジュプッ、ニュプッ、ジュプッ、ジュプッ!

動きやすい騎乗位にされた事でクール美女の動きに拍車がかかり、大きな尻を左右にくねらせ、跳ねるように腰が上下し始めた。

「グルルルルウ……淫らな雌め、こっちノ孔も貫いてくれるっ!」

淫部を舐めていた魔物が尻孔に龜頭を当て、ミシミシと小さな窄みを押し広げ醜い雄槍を挿入していく。

ズニウウウウウウウウウウウウッ!

「くはッ!? ダメッ……そんな太いの、ンはッ、お尻は……はうッ、はひいひいひい
いひいひいひい——ッ!」

自分の細腕のような魔肉で尻孔を貫かれ、シディアは悲鳴をあげながら背を仰け反らせた。初めての貫通に尻孔の皺は裂けるほどに広がって、蛇腹状の腸筒には大きく張り出した亀頭エラがボコボコと填まり、尻孔を雌穴に変えながら奥へと向かって突き進んでくる。下半身の二つの孔に挿入された事で彼女のお尻は一回り膨らんだように肌が張り、さらには腔内の巨魔根が後ろから押され、より鮮明にボコッと腹部に浮き出した。

「コの雌ノ尻、狭くて最高の淫尻だア」

「ぐうあひいひいひいイッ! いらあ……えッ!? んあ、あはッ、嘘ですわ……お尻がもう痺れ……はふッ、んふうううううううううううううんンッ!」

肢体が仰け反り、勝手に動き始めた肉体が峰乳を千切れんばかりに揺らし、腰を激しく上下させて二孔で魔幹にしゃぶりつく。尻孔に突き刺さった肉槍は挿入時こそ痛みがあつたがすぐに慣れ、今は腔のように腸がうねり人外幹を締めつけている。

前後の孔を激しく突かれる度に腔と腸は悦痺れを起こし、肉体が強制的に絶頂へと押し上げられ始めた。

「くうあんンンッ、あふッ、ンひッ! どうひれれすのッ……かららが勝手ひッ……腰が止まららふッ! どうひれ……どうひれれすのおオオオおオオオッ!」

紫髪の美女は二孔から肉交の淫水音を奏で、涙が零れそうなほど潤んだ紫瞳にまだ挿入してこない魔物のペニスを映した。呂律の回らなくなり始めた唇は喘ぎながら唾液をコボ

コポと溢れさせ。切ない疼きに耐えられなくなった峰乳は自ら両手で揉みしだき、ピンツと尖った乳芽を指先でつねるように引っ張り甘美な鋭痛を楽しむ。

掻き出された膣と腸の一部が淫らに蠢いて改造魔物の淫囊までしゃぶり、質量を増した美尻がピクピクと痙攣し絶頂が近い事を告げた。

「ゲッヒッヒッ、尻振りナがら我のチ○ポを見つめやがって、そんなに欲しいノか？ この雌豚メが」

「んあッ、そ……そんな事あひらへんわ、私は穢ららしひ魔物ろモノなんれ欲ひくは……んひッ、はあはあ……ンあアあッ！」

否定の言葉で喘ぎながら、濡れた紫の瞳が最後のモノを映したまま離れない。膣と腸は今にも全身を感電させてしまいそうな悦痺れを走らせ、頭の中から理性を奪っていく。

「ククク……、雌豚メ、我のはその淫らナ乳房で扱いテ貰おうか」
「ンッ……あッ……ああ……」

大きなゴリラ体が目の前で仁王立ちし、反り返った醜い巨根を峰乳の谷間に押しつけてきた。美女の口で一度精を放ったそれは白濁と唾液にまみれて異臭を放ち、胸に欲情した雄熱の猛りを染み込ませてくる。

（ああ……熱いですわ……心臓までペニスの熱が……）

胸に押しつけられた人外の淫根をしばし見つめ、彼女は自ら揉んでいた二つの肉果実を中央に寄せ、柔らかい乳房で魔の雄槍を包み込んだ。彼女の峰乳は女の腕ほどもある魔根を完全に包み込んでいる。胸上から現れた亀頭の先から溢れたカウパー液が二つの乳房を

汚し、男を誘う妖絶な谷間へと伝い流れていく。

「淫乱ナ雌め、いイ忘れていタが我らノ肉幹から滲ム体液は女を狂ワす猛毒だ。膣に染ミ込めばサキユバス同様の淫女にナリ、取り返しガつかない身体にナるぞ」

「そ、そんなッ!? 今さら言ふらんれ……あふッ、もうらめ……もふ我慢られきらひ……、あんソッ、あッ……私もふ……欲ひくて……もうッ!」

ジュプッ! ヌプッ! ジュプウウウッ!

肢体が発情してしまった原因を知らされ、彼女の残されていた理性が完全に吹き飛んだ。口虐で精液を飲まされ、膣は魔幹から滲み出た淫毒を擦り込まれている。もう手遅れな状態なのだ。

膣や腸は淫幹の爛れ肉と襲を絡ませ合い、子宮口は巨亀頭を啜え、陵辱液を貰おうと鈴口を吸いまくっている。自ら二つの柔房で魔肉槍を抜く両手はもう止まらず、上半身全てが雄熱で火照らされ、発情の汗と陵辱液にまみれて艶めかしくヌメ光った。

「あアああアあああッ! もう限界れすわッ。アソコとお尻が熱ふて……はふッ、もうらめッ、くらしい……貴方がたの濃い精液れ私をめちゃくちゃにしてえエえエえッ!」
(もうどうなつてもいいですわッ! この醜いペニスで気持ちよくなれるなら……魔物の仔を孕まされても……、アソコが二度と使えなくなつても構いませんわあああッ!)

人間相手では得る事のできない肉悦が女調査官の精神を淫色に染めあげ、完全に魔の雌へと肉体の全てを変化させてしまった。

魔雌となった美女は濡れた声で陵辱を求めると、いきなり胸の谷間から見え隠れする拳

亀頭に舌を伸ばして鈴口を責め、美尻を激しく左右に振りながら上下運動を繰り返し、魔の淫具となった膣と腸の二本をきつく締めつけて扱く。

青紫のロングヘアは淫らに宙を舞い、肉悦にトロけた美貌は淫笑を浮かべ、ウツトリと舌を這わせる巨亀頭を濡れた瞳に映した。

「いひれすわ、いいッ！ もつろ激しく突きあへれッ！ ひゃふッ……わらくひの身体全ふ犯ひてッ！ オマ○コ突き壊してえええエえええエええエエエッ！」

肉悦を得る事しか考えられなくなった美女は、目の前の魔物に潰れるほど強く乳首をつねらせ、秘孔を貫いている魔物に淫核を潰れるほど強く摘ませ嬌声をあげた。肢体は上下する度に秘孔と尻孔をきつく締めつけて淫幹を扱きたて、自ら感じるポイントに亀頭を擦らせようと巧みに腰をスイングさせ、的確に絶悦のスポットを切っ先で突き上げさせた。

彼女の腹部はその度に淫核の少し上が内部から膨らみ、水風船が破裂したように大量の愛液が秘孔からしぶく。

淫欲に屈した美女調査官の淫姿に、三体の改造魔物たちは陵辱槍を限界までいきり勃たせ、肉幹の爛れを膣や腸の襞に絡ませて大きくうねらせ、内部に欲望の濁液を駆け上らせながらビクビクと脈動させた。

「グウオオッ！ いきなり膣技まで使イヤがって……、出る……出るゾ、コの淫雌メ！」

「我モ出る！ コの雌の尻を破裂させ、裂けるまで射精してくれる！」

「ゲヒッ、コノ貌白く染めテやる！」

「あふッ、ああッ！ 早ふ……早く出しれ……、早くイカせれええええええええッ！」



（くはっ！ 嫌……嫌だあ……、こんな奴が初めてなんて……こんなウジ蟲に奪われるなんて……）

調査官としての誇りが少女のように叫んでしまいそうな悲鳴を吞み込み、胸の中で木霊させた。

膣内が醜い亀頭に広げられ、僅かな痛みと共に淫音を鳴らしながら貫かれていく。その男の欲望の塊ともいえるペニスに処女膣を広げられ、胎内を穢してくる雄槍の脈動に涙が溢れて屈辱に赤く染まった頬が濡れていく。下腹部には自分の体温とは明らかに違う熱の塊があり、膣内に男が挿入ってくるのを如実に感じてしまった。

「くひっひっひっ、すぐにズッポリと儂のチ○ポを填めて、濃い精液を注いでやる」
「やめろ……はくっ……汚い……くううう——っ！」

醜男に処女を貫かれてしまう屈辱感に呻き、身を強張らせた瞬間。処女膜を破ろうとした亀頭が騎炉に作られた結界に触れ、それ以上奥に入るのを阻止された。

処女膜だと思って突き破ろうとする男だが、何度亀頭を叩きつけても結界が破られる事はなく。突く振動だけが膣内に伝わり、太鼓のように子宮内まで響き震わせてくる。

「ちっ、これ以上挿入らんか？ 仕方ない……。このまま犯し、その膣に精液ぶちまけてやるわい」

ズッチャ……ズチュ……ズツニユ……。

（ぐうっはぁッ！ はうっ、動くな……ひゃふッ、奥まで響いて……おかしくなるっ！）

感じやすい秘孔、そして結界に亀頭を叩きつけられ、子宮まで振動させられる力強いピ

ストーンに意識が飛びそうになり、一突きごとに精神が麻痺していく。

魔唾液を注がれた胎内は染み込んでくる男の欲情熱に喜び、入っては出ていく亀頭に膣襞を絡ませ、襞粒で擦りながら舐め回してしまふ。改造人間によつて淫らに変えられた尻孔はヒクヒクと開閉し、自分を取り囲む男のペニスを啜えたくて、舌で嬲られ続けているような焦燥感で頭の中を掻きむしつてきた。

(んふうっ……なんでこんなに……あうっ、感じたくなんてないのにっ！)

処女を貫かれず、初めて味わう痛みを伴わない膣悦に抗う術を持たず、ピンクルージュの唇を噛み締めたまま肉体を震わせる璃那。醜い中年の膣突きに併せて肢体は揺らされ、つねられていた二つの乳首がジンジンと疼き、肉房の中に悦痛を響かせていく。

「ひっひっひっ、この淫乱め。膣に何か仕込んでいるクセに、亀頭だけでこんなにも膣の中が蠢いてやがる」

(違っ、私は何も………)

ズチュ……ズブッ……ズツチャズツチャ……

魔舌の陵辱で乱れた調査官の姿に醜男は興奮していた。亀頭だけの挿入にも拘わらず彼女の片足を肩に担ぎ、他の男たちにも挿入部を見せるように、犬の放尿ポーズで秘孔を犯してきたのだ。体位を変えられた事で、左右に開ききつた淫唇はその鮮やかな色まで男たちに晒され、切っ先のみを啜えさせられて捲れ返り、薄紅色の膣壁まで掻き出される秘孔に男たちの淫視の矢が突き刺さってくる。

「おい、あの金髪女のマ○コ具合よさそうだぜ！」

「けけ、美味そうに涎垂らしてチ○ポを啜えてやがらあ」

大画面には捲り返る秘部がアップにされ、シディアや恵を犯す男まで卑猥な言葉で辱めてきた。

(ンあ……はふっ、み……見るなっ！ んあん……そんなに見られたら……ッ！)

視辱で秘孔を貫かれる刺激がより強いものに変わり、まるで何人もの男に嬲られているような下半身が熱く、肉欲で胎内が激しく蠕動していく。汗にまみれた肢体は胎内に欲情の熱塊を仕込まれたように発情し、DITの制服は突かれる度に淫らに揺れ、まるで男を誘う手のように舞ってしまう。

プックリとした女丘に引っかけられたピンクのショーツは激しい膣突きに振れ、薄い黄金の草むらと、包皮からピョコッと剥き出た淫核を完全に晒してしまった。

「くはう……うう……ッ！ ッ！ くうッ……んうう……」

(くうあ……こんなの耐えられない……もう抜いて……抜いてええッ！)

醜い亀頭が結界に叩きつけられる度に膣が蠕動し髪が捲られる。ザワザワとした痛痒いその悦流は敏感になった全身の肌をくすぐり、処女の理性を狂わせていく。膣から広がっていく肉交の蟲悦感に彼女の肢体は震えだし、秘孔は喜んでるように亀頭を啜えしゃぶり愛液を滴らせていく。

プルプルと痙攣を繰り返す内太腿は貞操筋を浮き上がらせ、視姦する男たちの情欲を挑発してしまった。

「ひび……淫乱な雌犬が、放尿ポーズのまま貞操筋まで震わせ始めやがったわい。なら



今度は本物の犬らしく、儂の上で四つん這いにでもなりやがれっ！」

処女孔を亀頭で貫いた男がそのまま身体の下に入り込み、醜く出っ張った腹の上で美しい肢体を強引に四つん這いにさせてきた。

恥辱の体勢にされた璃那は、そのまま重力に逆らう美胸を下になった醜男にムニムニと揉まれ、尖った桜色の頂を吸われ生暖かくザラついた舌を這わされてしまう。肉房には再び心地よい圧迫感もたらされ、温かいヌメリと共に美乳全体をくすぐったい乳悦で包み、肉果実全体を治りかけの傷口のようにジクジクと痒くさせてくる。

「あふっ……ううう……そんな胸まで……あくっ……もうやめ……」

ジュブ……ジュップ……ズチユズチユ……。

感じやすい秘孔。そして四つん這いにされ、しゃぶられながら揉まれる美乳にプロンド調査官の理性が消えかけ、濡れた息を艶めかしく吐いてしまった。下から突き上げられる秘孔からは、くすぐったくて痒い快樂の悦流が肉体の芯までビリビリと痺れさせ、一度絶頂に達した肉体が再び快樂の頂点へと昇ろうとしている。

「はあはあはあ……こんなの嫌なのに……ひゃふッ！ 身体に力が……」

もうどうする事もできない。嫌悪感を抱く男に犯されているというのに、秘孔を突かれる肉悦に身体に力が入らず、暴れる事さえできない。

助け出そうとした仲間は二人とも対面座位の体位で腔を突き上げられ、別の男に後ろの孔まで貫かれ喘いでいる。彼女たちの両手は左右に立つ男の淫根を握り抜き、交互に啜っては逆る白濁を嚙下していた。

(私もお尻に……)

全ての孔を塞がれ喘ぐ二人の姿に、満たされない尻孔の欲求が強くなっていく。肉体が熱くなり、背徳感と被虐の喜びが駆け抜けていった。

(な、何を考えているの私は!? こんな恥辱を欲しがるなんて、私まで屈したら……)
歓喜に喘ぐ仲間の姿に自分を重ね、尻虐の快楽を思い出してしまふ。冷静な思考が慌ててその考えを掻き消そうとするが遅く、腸内に熱く硬いモノで貫かれた感覚が蘇ってしまった。

「んああッ! ひやッ! もうやめろっ、これ以上はもう……嫌だあ……んうッ!」
快楽に喘ぐ仲間の姿。そして否定する事のできない胸や秘孔の肉悦に璃那は肉体の限界を感じ、耐えきれず弱気な言葉を洩らし、美貌を左右に振り始めてしまった。

その姿に彼女を貫く中年男は興奮を強め、下から形のいい肉房に醜男を埋め、腰を激しく突き上げて秘孔を犯す亀頭の出し入れを速めてきた。

「やめろ……あふッ……汚い貌を私の胸に挟まないで……うう……」

胸の谷間に感じる男の荒々しい呼吸と、激しく突かれる秘孔の肉悦に形のいい唇からは快楽に耐える艶めかしい淫声が洩れ、秘孔はビチャビチャと愛液を飛び散らし周りの男まで濡らしてしまった。

「この女もう限界だぜ、いやらしい声を出し始めやがった!」

「ひゃひゃひゃ! こんなにマ○コから汁噴き出す女は初めて見た!」

肢体を囲む男たちが下卑た声をあげ、痴態を言葉にして辱めてくる。

璃那は自分の痴態を言葉にされる羞恥に身が震え、肉体に感じていた発情熱が何倍にも膨らみ始めているのに気付いてしまった。美貌は今まで以上に紅潮し、潤んだ青い瞳が扇情的な色気さえ醸し、自分を取り囲む男の陵辱心を誘ってしまう。

「もう我慢できねえ……、俺はこの尻使うぜ」

「じゃあ俺はこのマ○コみたいなのだあ」

「犯してやる、この気の強い女を犯し精液まみれにして、淫乱な娼婦に変えてやる！」

今まで見ていただけだった中年男たちが、ブロード美女の醸し始めた妖しい色気に我慢ができなくなり、一斉に彼女の肢体に手を伸ばし醜男から美しい上半身を引き起こしている。片手では生臭い淫根を自ら抜き、周囲の全員が肉悦に抗うブロード調査官の美肢体へと近付いてくる。

璃那の周りは瞬く間に噎せ返るような雄臭と、ネットリと処女肌に纏わり付く淫熱に包み込まれ、近付いてくるペニスの脈動まで感じられた。

「きゃう……嫌だ……んう……そんな汚いモノをもう近付けないで……ああっ!？」

ビリビリッ……ブチッ!

尻孔に切っ先を突きつけた男がピンクショーツを掴み、邪魔なシルク布を力ずくで引き千切った。完全に隠す布を奪われた桃尻は、そのままグイッと尻タブを左右に広げられ、小さな窄みに欲熱を宿した亀頭を押しつけられてしまう。

「ひあ……やめて……今そこに挿れられたらおかしく……」

尻の谷間に感じた雄熱に理性を失うような恐怖を感じ、彼女は桃尻を左右に振って尻虐

を拒む。だが尻孔は待望していたモノにヒクヒクと蠢き、早く腸内に迎えようと新たな亀頭にキスを繰り返してしまった。

「けっ、こんなにも尻孔をヒクつかせやがって、すぐにぶち込んでやるぜっ！」

ズブッ！ ズニユズニユズニユウウウウウウウッ！

「くはッ！ だめ……そこは……はうッ！ んううう——ッ！」

尻孔に突きつけられたペニスが異質な挿入音を鳴らし、一気に蛇腹状の腸内を貫いてきた。処女を奪われていた淫尻は瞬く間にペニスを根元まで呑み込み、待ちに待った熱い淫根を蛇腹筒全体で締めつけ、腸壁を亀頭裏にまで絡ませ抜き始める。

「はひいひいッ！ お尻っ……お尻はッ！ あくッ……はあはあはあ……」

前孔に亀頭を詰められたまま後ろの孔を深く貫かれ、紅潮した美貌を振りながら短い悲鳴をあげ背を仰げ反らすブロンド美女。二つの肉果実は大きく揺れて周りの男たちを興奮させ、陵辱液を進らせようとペニスが何本も唇に擦り付けられ、両胸を中心に寄せ作られた柔らかな谷間に挟み込まれてくる。

「んぶあ……汚いモノを口に当てないでっ！ ぶっ……胸に……汚い……やめ……ンブッ！ チュプチュプチュプウウウウウウウッ！」

唇を貫こうとするペニスに抵抗し貌を振る。だが、情欲に目を血走らせた一人の男が彼女の頭を押さえ、強引に異臭を放つペニスをピンクルージュの唇に突き刺してきた。

亀頭は瞬く間にピンクの舌の上を滑り、口腔を吐き気を催す雄臭で充満させ、狭い喉奥にまで切っ先を詰め込んでくる。醜い切っ先から生暖かくトロリとした先走りの液が喉内

に垂れ、穢れない粘膜にカウパー液が染み込んできた。

(喉に汚いのが染み込んでくる……気持ち悪い……)

喉に填められたペニスの苦痛と嫌悪感に、一瞬気を失いそうになった。だが秘孔と尻孔の一突きで意識は戻され、肉体の中で生まれた淫炎が肢体を燃やしていく。唇は本能のまま口腔の淫根に舌を這わせ、早く苦痛から逃れようと狭い喉で亀頭を抜いてしまう。

美唇は淫らに捲れ返り、精欲を満たそうとする淫根が処女の舌を先液で穢し、不思議なしよっぱさを残しながら喉奥にまで突き刺さり脈動させてくる。

半裸の肢体は、下から突き上げられる二孔の衝撃で大きく揺れ、揉まれながら谷間を陵辱される肉果実は淫猥に歪み、シコリ尖った頂が相手の腹部に擦れジンジンと痺れていく。肉房の内部は得体の知れない生物が蠢いているように疼き、心臓まで雄の欲情熱が侵食し陵辱してきた。

秘孔や尻孔は亀頭が出入りし、腸内でズニズニと肉槍がピストンする度に数百ボルトもの快楽電流が全身を駆け巡り、処女の脳を快楽という名の刃で貫いてくる。

「んチュっ……んふぁ、ん、ブふうえッ……汚なすぎて吐き気がするわ……ううッ、覚えておきなさい、お前たちのようなウジ蟲は必ず私が……んヂュブアッ!?」

「しゃべりながらしゃぶってんじゃねえよ、こうやるんだ、この下手くそっ!」

口から淫根を吐き出し、ブロンド調査官は男どもを睨み侮蔑する。しかし、そんな事など彼女を輪姦する彼らは気にも留めず、再び唇を肉槍で塞ぎ、金色の頭を掴み無理やり前後に揺さぶり始めた。

突然の強制口淫に処された美貌は驚きに瞳を見開き、喉が突き破られてしまうのではないかと思うほど喉奥に亀頭を叩きつけられ、唇を淫らに捲り返されてしまう。舌は激しい口腔の律動に唇の外まで掻き出され、唾液が美胸に飛び散り双美乳を妖しく濡らした。

（なっ、なんで身体が熱いの……犯されてるのに……胸が切なくて……アソコとお尻が……）

何人もの男に恥辱を受け続け、彼女の理性が麻痺し始めていた。胸を乱暴に扱われ、秘孔と尻孔を貫かれている姿を見られていると思うと胸が高鳴り、全身に掻きむしりたくなるような狂悦が駆け抜けていく。

膣を觸る亀頭は強制口淫される美女の姿にビクビクと震えだした。醜男は璃那の細腰を掴み、膣を己の白濁で穢そうと腰を激しく突き上げ口から汚らしい涎を垂らしている。

秘孔に感じる雄の凶器は一突きごとに体積を増し、肉幹をビクビクと脈動させて射精が近い事を肢体に伝えてきた。

「ひひひ、もう限界だ……。射精してやるぞ……。僕のチ○ポをしゃぶるマ○コに直接出して、溢れ返させてやるっ！」

ジュプッ、ジュプジュプジュプウウウウウッ！

「んふあッ、んッ、んンッ！ 出ふうな……チュパッ……膣内り射精ひたら赦さふあい……ンむッ……胎内ひ射精しふあら必ず消滅させてやるっ！」

女の本能が妊娠を恐れ、淫根を唾えたまま美貌を振り拒む。だが醜男が腰の突き上げをやめる筈はなく、結界に当たっては膣奥まで響く振動が彼女の精神を官能色に染めていく。

潤んだ瞳で周りを見てみれば、胎内に挿入する事も胸に挟む事もできなかった男たちが、四本のペニスを肢体の内外を犯される瑠那の姿を眺め、亀頭を胸や羞恥に染まった美貌に向け自ら扱っていた。

(この人たち……私を見て……)

自分を見て興奮する男に気付いた瑠那の両手が彼らに伸び、これ以上自分を陵辱の的にさせまいと突き飛ばそうとした。だが力の入らなくなった彼女の手では男たちを遠ざける事はできず、逆に彼らを興奮させるように先液でヌメる淫根に触れてしまった。

「うほっ、この女、とうとう俺のモノに触ってきやがった！」

「おお！ これはいい、淫乱調査官の手筒で扱いて、綺麗な身体にぶっかけてやるっ」

ブロンド美女の手に触れられた二人の男が興奮に声を荒げ、彼女の手に自らの手を重ねてペニスを握らせ扱かせ始めた。

掌には硬いゴム塊を握ったような感覚と、それぞれ違うリズムの脈動が伝わり、胎内や胸に挟まったモノと同じ灼熱感で穢れなき両手を灼いていく。

「やめっ、んプッ……手まで熱いのが……もういい加減に……！」

ブロンド調査官の美肢体を囲み、ハゲ鷹のように貪り齧る男たち。ペニスを包んだ双乳は千切れるほど上下に揺さぶられ、両手は淫根から溢れた先走り液でベトベトになっていく。膣内と腸内では、激しいピストンを繰り返すペニスが脈動を速めて亀頭を膨らまし、口腔を犯すペニスは唇から唾液を飛ばさせ、喉奥を切っ先で広げては雄の味を擦り込んでくる。

「んふあ……んっ、んっ、んんっ！ 激し……くあッ！ 壊れ……」

肉体を、精神をも壊されてしまいそうな陵辱に涙が頬を伝う。一度絶頂に達し、膣に唾液を注がれた肉体は如実に肉悦を感じてしまい、肌をくすぐるムズ痒い悦流が止まらなく駆け巡っている。

過酷な陵辱に晒され淫色に染まった肉体は、陵辱者たちの手によって腰を上下に動かされ、掌の中のモノを激しく扱き親指で先割れまで撫でさせられてしまう、

口腔の肉幹は何度も可憐な舌で舐めさせられ、カウパー液塗れにされてしまった。膣や腸は内部を突き刺す雄槍に痛いほど削られ、体外からでも分かるほど激しく蠕動を繰り返している。

（くうああッ！ 激しくなつて……ヤダッ！ もう私から離れろおおおっ！）

全身から伝わる陵辱の衝撃と荒々しい雄の猛りは、狂おしいまでの痺れとなつて脳を貫いてくる。彼女の美貌は快楽を拒みながら青い瞳で涙を流し続け、艶めかしい肢体は汗と淫らな制服に彩られ、淫魔のような妖絶な色気と淫臭まで醸し始めてしまった。

「んふうっ……チュパ……んっんっんっ……、もう……もうやめろ……もう私から離れろっ、このウジ蟲いいいいい！」

絶頂と肉体の火照りに耐えかねた璃那が大きな声で叫び、震える肢体が陵辱する全てのペニスを刺激してしまった。

口・膣、尻・胸を犯すペニスは同時に脈動を速めて先走り液をピュシュッと噴き出し、両手のものはきつく握らされ、亀頭を自分の貌へと向け激しく扱かされてしまう。くぐも

り声ながらも肉悦に耐え、全ての男を侮蔑した唇は全員の官能を刺激する淫声を奏で、視覚と聴覚で中年男たちの本能まで刺激してしまった。

「うほっ、この女、やっぱりただの雌犬だ！」

「これじゃ射精ちまうっ、うほ、おほおほおほ！」

「ワシも射精する！ ほおおおおおおおおつ！」

ビュプッ！ びぶッ！ どびゆるっ！ びゅプびゅしやビィプるるるるるるるうううううううううッ！

「はむッ、チュパ……：チュルッ!? ひいやああアああアあッ！ 射精てるッ……：私の中に……アソコにいいいいいいいいいいいいいい——ッ！」

腸内と口腔、そして秘孔のペニスが同時に弾け、処女の体内を猛り狂う炎のように熱い陵辱液が灼いていく。

初めて受けるドロリとした最初の精液を舌に絡め、その蟲を噛み潰したような苦液を嚙下させられた彼女はペニスを吐き出し、嘔せ返るような迸りを美貌に受けながら、貌前に突きつけられ射精を続ける亀頭を次々と舌先で舐めさせられた。

快楽を知っていた尻孔は蠢きながら腸壁を蠕動させ、腸筒の中を精液の熱さと白濁で瞬間に満たされてしまった。穢れなき秘孔に放たれた陵辱液は、亀頭から直接結界にビヂャビヂャと付着してマグマのような雄熱を膣奥にまで伝え、秘孔と肉幹との隙間からドロリと胎外へ溢れ出していく。

「灼けるッ！ 私の胎内が熱いので灼けてッ！ 嫌ッ……：おかしくなっちゃ……：わたし



しがおかしくなっちゃウウウウウウウウウウウウ——ッ！　　ッ！　　ッ！

プシュッ！　プシュウウウウウウウウウウウウ——ッ！

膣内と腸内を灼き、膣壁や腸壁に絡みながら肉体に染み込んでくる精液のおぞましい悦濁に、美しきブロード調査官の肢体はガクンと仰け反り、壊れた蛇口のように尿道から潮が噴き出した。

硬直した肉体はそのまま痙攣を繰り返し、天井を見上げた瞳には初めて胎内射精をされた悲しみと、肉体が消失したような絶頂感に、快楽とも屈辱ともつかない涙が溢れ紅い頬に伝っていく。

ビュプッ！　どびゆるっ！　びいぷるううううッ！

璃那の絶頂に呼応したように両手と胸の男根が弾け、清らかな肢体に火傷するほど熱い白濁が撒き散らされた。美貌は左右から迸る精液に染められ、ペニスを挟んだ双乳は谷間から噴出する陵辱液でドロドロに穢れてしまった。貌や美乳に撒き散らされた白濁は、美胸を白く染めながら腹部へと伝い、捲られた黒のタイトミニに染み込んでいく。

甘い香りを放っていた肢体からは、瞬く間に鼻を突くような雄臭が匂い立ち、処女を淫魔のように彩り変えていた。

「んあっ……うう……こんな酷い……ケダモノ……」

大量の白濁で身体の内外を灼かれ、璃那は自分でも分からない弱気な言葉を洩らし、絶頂に昇らされてしまった肢体を仰向けに倒していく。

「ひび……、気が強くても雌は雌だな」

肢体からペニスを引き抜いた男たちは陵辱液の残滓を美貌や、フルフルと震える桜色の乳首にぶちまけ、捨て台詞を吐きながら白く染まった美女から離れていった。

「あ……んあは……はあはあはあ……うう……」

陵辱から解放されたブロンド調査官は、精液を浴びた身体から淫らな熱が冷めていくのを感じていた。と同時に肉体が穢れてしまった事実に止まらない涙を流し、雄液に穢れた身体を震わせ、膝を抱くように肢体を丸めていく。

「けっ、泣いてるんじゃないやねえよ、お前の乱交ショーはまだまだこれからだぜっ！」

ビリビリ……ブチッ！

「きゃうう——っ！」

新たに彼女のもとに現れた体格のいい陵辱者が、数人の男と共にブロンド美女の肢体を仰向けに戻し、ブラウスとブレザーを乱暴にはだけさせ、ブラまでも引き千切り上半身を半裸にしていく。

璃那は咄嗟に両腕を胸前で組み穢れた美乳を隠す。だが、その男は両腕を払い除けて彼女の肢体を大の字に押し倒し、未だコブッコブツと精液を溢れ返らせる尻孔に、火傷するほど熱く猛った亀頭を押しつけてきた。

「ああ……お願い……もうやめ……て……」

「けっ、ふざけるんじゃないやねえっ、俺たちもこの淫尻を犯し、満足するまでその身体に精液をぶちまけてやるぜ！」

ズブウウウウウウウウウッ！

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>